L3T/L3TK/L3TF

春期講習

解答

Ｚ会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

1章

【問題】（演習）

出典…坪井秀人『感覚の近代』／一橋大学　07年

文章略解

百年前、ラフカディオ・ハーンは物売りの声やお寺の鐘など、当時の日本の街中の音を興味深く書き留めた。しかし現在の日本では、こうした生活の中の豊かな音の数々は失われてしまった。街中の音は暴力的な侵入者でしかなく、我々は百年前の日本の音の風景に異国情緒さえ抱く。メディアを介した情報に過度に依存し、人間の肉声を通じた情報を不当に貶めている現代人が、日本の過去の音の風景を知ることは意義深いことだと思われる。

解答

問1　A＝太鼓　B＝鎮座　C＝石畳　D＝豆腐屋　E＝侵入者
F＝忌　G＝邪魔　H＝排除　I＝常態化　J＝寛容

問2　人間の生活から生まれる地域固有の音空間。〔20字・解答例〕

問3　百年前の音の空間が現在日本にはないから。〔20字・解答例〕

問4　情報技術への過度の依存が眼前の現実を不当に軽視する傾向を生み、両者の価値が逆転してしまったこと。〔48字・解答例〕

問5　現代社会は人間が現実から遊離し、メディアを介した情報に過度に依存して生きていることをあらためて認識させてくれるから。

〔58字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…倉石忠彦『民俗都市の人びと』／お茶の水女子大学　98年

文章略解

都市は、地理的に把握できる空間としての側面と、時間的に他の地域より先んじた存在であるという側面と、文化的な側面との三つをもっている。都市とは、それ自体で独立した存在なのではなく、その後背地としての村落との相互の影響の上に成り立っているものである。従来は都市＝表層文化と、村落＝基層文化という対比で捉えられることが多かったが、これからは両者に通じるものとして基層文化を捉えなおしていく必要があろう。

解答

問1　○　地理的に把握できる空間としての側面
　　○　時間的に先んじた存在であるという側面
　　○　文化的存在としての側面　〔順不同・解答例〕

問2　市街地から外れた住宅街や、山林や、農業地帯など。〔24字・解答例〕

問3　都市の活気と繁栄は、後背地としての農村の存在と不可分であり、両者は物資や人の交流によって互いに影響を与え合ってきているということ。〔65字・解答例〕

問4　本籍地　〔解答例〕

問5　そうしたな（33行目）

問6 従来は都市の文化が表層文化で、村落の文化が基層文化であると二項対立的に捉えられていたが、筆者は村落と都市の双方に通じるものとして現在の基層文化を捉えている。〔78字・解答例〕

問7 ある都市が、独自の文化を創造していくためには、まず第一にその都市の人々が自分の土地の文化に誇りを持つ必要がある。その前提として、盲目的に崇められやすい欧米や中央の文化に対する確かな批判眼の養成を、郷土教育と合わせて行うべきである。また第二に、実際にその都市独自の文化基盤を整備する必要がある。文化施設等の社会資本の充実と合わせて、文化の面において核となるリーダーを育成していく体制の充実も望まれる。〔199字・解答例〕

解説

問1 次段落以下の要点を抽出していくことが作業課題。その際、傍線部分にも設問の指示にもある「側面」という語に注意していこう。第二段落冒頭（4行目）に、「『都市』はまず空間としての側面をもっている」という記述がある。箇条書きにするならば第一の点の核はこれ。続いて、第三段落（8行目）に「空間的なものだけではない性格がある」とされており、これについては同段落末尾で「つまり都市は時間的概念と結びつく存在でもある」（12行目）とまとめられている。ここが二点目。さらに、続く第四段落（13行目）で「それは必然的に文化的存在としての側面を主張することになる」とあるわけだから、ここが三点目。この「空間としての側面」・「時間的な側面」・「文化的存在としての側面」を押さえ、その上で解答欄の許す範囲で肉付けをしていけばよかろう。

問2 この段落で「都市的空間」とされているのは、「商店が軒を連ね、高いビルがそびえ、盛り場には人びとが満ち溢れている」（5行目）というところ。これとの対比の上で、「都市的空間としてではない空間」を考えていけばいい。問題文の中においては「都市」と対比されているのは「後背地としての農村」（21行目）であるが、「具体的に例示せよ」という設問の指示に従うなら、他にも同程度の具体性を持つ例を並べて示す方がよかろう。行政的には「市」のエリアの中にありながら、商業以外の機能を持った部分や、あるいはここで言う「都市」＝商業地域以外の土地の例を挙げればいい。

問3　傍線部分が「それだけで完結するものではない」という表現になっていることから考えれば、設問の要求は「では、何があれば都市は完結するのか」を答えていくことであろうと推測できる。

ここをふまえた上で問題文を追っていくと、「なによりも都市の活気と繁栄はその後背地としての農村の存在にあった」（21行目）の一文に至る。ここを核にして、都市と農村との関係性を説明していけばいい。問題文中に「物資や労力の提供」（21～22行目）・「都市に仕事を求めて集まる農民」（20行目）などの記述から、双方の間に人と物との交流があり、「相互に影響を与えつづける」（28行目）旨の指摘があればいい。

問4　「本貫」とは、律令制における「本籍地」の意味。これが押さえられていれば解答としてケチのつけようはない。こうした辞書的な意味がわからなくても、問題文の流れから「元々いたところ」「出身地」の意味であることは推測できる。実際の採点基準はつまびらかでないが、「生まれ故郷」「出身地」程度の解答が書ければ得点になるであろう。

問5　傍線部分の内容を検討することから解答は見えてくる。傍線部分に言う「そうした存在」とは、**問3**で検討したように、都市と村落とが「相互に影響を与えつづける」（28行目）ことを指す。これが「地域的都市」では「無視できない」ということと「相反するあり方」を述べた部分……というのがこの設問では求められているわけだ。だとすれば、①「地域的都市」ではないところで・②「都市と村落との相互の影響」を「無視する」というあり方について述べている部分を探していけばいいことになる。

①「地域的都市ではないところ」とは、問題文中では次段落に対比されている「江戸、東京」（30行目）に相当する。この「東京」において②「村落との影響を無視する」に相当する内容は「都市最優先と、過剰なまでの中央意識」（33行目）のところ。この部分を含む一文を抜き出せばいい。

問6　このような「違い」の説明に関しては、「分量は等しく」「内容は対比的に」という二つのことを念頭に置いて解答を作っていく。

ここでは、傍線部分が「しかし」という対比・逆接の接続詞に導かれていることに着目できれば容易であろう。この傍線部分を含む段落の末尾が「当然……はずのものである」（40行目）となっていることから推せば、この部分が筆者の主張であるということになる。要するに、筆者は①「基層文化」を「都市文化とかかわる」ものとして捉えている、ということだ。

これとの対比が明確になるように、前段落の内容をまとめていく。これも「つまり」（37行目）という要約の接続詞に注目できれば容易。従来は②「基層文化」とは「村落文化を対象と」するものと考えられていた、ということだ。

以上①②が含まれた解答ならば基本的にＯＫ。解答例においては、双方の対比をクリアーにするために、②の方に「二項対立的」という語を添えてみた。

問7　「自分の考えることを述べよ」という設問の指示は、一見自由な記述を許すものと受け取られがちであるが、この設問はやはり部分説明の延長線上にある。傍線部分の内容を踏まえた上での意見でなければ、高い評価を得られるものにはなりにくい。

ここでは、「個性的・創造的な文化」という表現が、直前の「外来の文化も……伝来摂取され」（9～10行目）に続くものであることの意味を押さえたい。要するに、外からきたものを伝えるのではなくて、「その都市ならでは」の（＝個性的な）文化を、模倣ではなく、独自に創り出していく（＝創造的）、ということだ。

だとすれば、指摘すべきは、「その都市ならでは」のものを可能にする条件、ということになる。より詳しく言えば、他の都市（あるいは他の国）の文化に対して卑屈にならず、その都市独自のあり方に誇りを持つというプライド（ローカリズム）を持つための条件、ということだ。この点を踏まえて意見論述をすれば高いポイントを得られよう。

解答にあたっては、二百字という字数に鑑みて、三つ～四つの文に分けて述べることを考えるといいだろう。その際、それぞれの文の役割分担に注意することだ。解答例においては、人々のメンタリティの面と、人的資源の面とに分けて述べてみた。

2章

【問題】（演習）

出典…西郷信綱「『わが古典』とは何か」／一橋大学　02年

文章略解

人が「わが古典」の原型を形成するのは幼年期である。様々な古典に対する是非の判断も実は個人が幼年期に経験した環境に大きく左右されている。幼年期は身体的リズムで世界と関わる点に特徴がある。したがって論理的な散文よりも音楽的リズムを持つ詩歌のほうに個人の価値観の秘密が隠されていることになる。しかし、感受性だけに固執してはならない。自己の資質を磨いてこそ「わが古典」は見えてくるにちがいないのである。

解答

問1　A＝隠微　　B＝文献　　C＝作動　　D＝無縁　　E＝軍配

問2　幼年期の経験を通じて無意識のうちに刻み込まれた感受性は、分化したことばを知的に再組織する散文作品より、身体を通したリズムがことばの未分化な単一性と結合している詩歌に接したときこそ開示されてくるから。〔99字・解答例〕

問3　古今集評価の是非は、個人の幼年期以来の経験や感受性の反映だという点で同じだから。〔40字・解答例〕

問4　単に狭い好き嫌いの次元や他の論評に左右されるのではなく、自分の身体に刻み込まれた幼年期からの経験やそれがもたらしている感受性の存在をきちんと意識し、その姿や可能性を追究する中でその感受性をより深く豊かなものに鍛えていこうとするこ

と。

〔116字・解答例〕

【問題】（自習）

出典…南木佳士『ダイヤモンドダスト』（文春文庫）／ 大阪大学　人間科・法・経済学部　98年

文章略解

高原の病院の看護士・和夫は、入院患者のアメリカ人宣教師・マイクと知り合う。マイクは癌の末期で、助かる見込みはない。マイク本人もそれを知っている。和夫に対し、マイクは昔ベトナム戦争で死を覚悟したときに、確かな星の配置を感じて安らぎを得たことを語り、かつて同室だった和夫の父・松吉の、駅に水車を造るという夢の帰趨を気にかける。静かに死を迎えるマイクの態度に、和夫は名状しがたい感動を覚える。

解答

問1　(1)＝さいご　(2)＝ふち　(3)＝じょうみゃく　(4)＝せいぎょ　(5)＝すなお

問2　(ア)＝5　(イ)＝4

問3　戦争で死の恐怖を体験したとき、確かな星の配置とその背後の神を感じて安心したことを再確認し、死に直面した今、再び生死を超越した安らぎを得ようとしている。〔75字・解答例〕

問4　マイクの語った死の重みに相当するものを和夫自身が持っていないことを残念に思う気持ち。〔42字・解答例〕

問5　松吉の願いが叶ったことを喜ぶとともに、死の間際でも回復を願ってくれた和夫に感謝する気持ち。〔45字・解答例〕

解説

問2　設問には「本文中における意味」とあるが、辞書的な意味と全く無縁でよいわけではない。双方をにらみながら対処していこう。

(ア)の「乾いた」とは、本来は「水分を少なく含んでいる状態」の意味である。しかしながらここでは、直前に「感情を表に出さない」（18行目）とあることから、ここでは感情的な部分を切り捨てていることの喩とわかる。だとすると、「湿った感情を切り捨てる」のニュアンスに近いもの……ということで、選択肢の中では**5**が選べる。**1**・**2**・**3**・**4**はいずれも「感情を切り捨てる」だけではなく、別種の感情が表面にでてしまっているニュアンスになる。

(イ)について、「予後」とは、「これから予想されること」の意味である。その語を「癌患者」（52行目）について用いているのだから、ここでは「患者がたどるであろうその後」の意味になる。これにもっともよく適った選択肢は**4**。**5**は近いが「行為」としている点で**4**には劣る。**1**・**2**・**3**はいずれも「これから」のニュアンスを欠く。

問3　傍線部分にある「誰かと話がしたくなった」理由について、筆者（＝南木）は、後の記述で「マイク」自身に「今、星を見ていて、あのときのやすらかな気持を想い出したかったのです。誰かに話すことで想い出したかったのです」（46～47行目）と語らせている。この部分に着目することで解答は導けよう。

まとめるべきポイントは以下の二点になろう。

(1)　「あのときのやすらかな気持」の説明

(2)　(1)を「誰かに話す」ことで再確認したいという思いの指摘

(1)に関しては、「ファントムで北ベトナムの橋を爆撃したときの話」（34行目）を要約すればよい。要するに、エンジントラブルを起こしてパラシュートで脱出したとき「とてもたしかな配置で星があった」（41行目）こと、そのときにマイクが「誰かこの星たちの位置をアレンジした人」（44行目）の存在に思い至ったこと、などをまとめていくことだ。解答例ではこの「アレンジした人」について「神」という語を用いてみた。

(2)に関しては、この「マイク」が既に末期癌の患者であり、本人にもその自覚があること（「この人はアメリカに帰る気がないようだ」＝12行目）に関連づけた説明を考えていく。「星たちとおなじ規則でアレンジされている自分を見出して、心の底から安心した」（45～46行目）ということは、生死を超えた造物主の存在に心安らぐ思いがした、ということであろう。それを誰かに話

すことで再び獲得したかった……という主旨の説明があれば、おそらくは出題者の要求を満たした解答になろう。

問4　解答欄の大きさを考えれば、要求されている解答は四十字程度のものだろう。この傍線部において「和夫」は「マイク」に対して「申し訳ない」と述べ、「マイク」に対して引け目を感じている自分を告白している（と筆者＝南木は設定している）。そしてその引け目の内容は「こんな感想しかない」ことにある。この「こんな感想」は、**問3**で検討した「マイク」の話に対しての感想である。ここで末期癌で死に直面した「マイク」は、自らのベトナム戦争での危機の体験を語り、「やすらかな気持」を再確認しようとしている。しかしながら、それを聞く看護士＝「和夫」には、そうした死に直面した経験はない。したがってただ「とてもいいお話ですね」（50行目）と繰り返すしかないのである。この点の指摘がなされていればＯＫ。

問5　**問4**と同様、四十字程度での説明を考えていく。

ここでの「マイク」の科白は、直接的には直前の「和夫」の科白「マイクさんも早くよくなって、見に来て下さいよ」（89行目）を契機とする。だとすれば、解答に必要な要素はまず「マイクさんも早くよくなって……」に対する感謝、ということになろう。末期癌で死に近い自分に対してでも、その病状の回復を願ってくれている看護士に対する感謝である。まずこの点の指摘は外せない。

しかしながらその「なぐさめ」は、「見に来て下さい」ということにも関わってくる。ここでは「松吉」が水車を造っているということ（58行目以下）を「マイク」が気にかけ、「もうすぐ水車が回ります」（85行目）という「和夫」の言に対して「それはいい。松吉さんはいいなあ」（87行目）と応えている、という情景が描かれている。だとすれば、ここで「マイク」の言う「とてもいいなぐさめ」は、その「松吉」の願いであるところの「水車」が実現したという喜びでもあろう。この点の指摘もほしい。

以上二点の含まれた解答ならばＯＫ。

●メモ●

3章

【問題】（演習）

出典…『堤中納言物語』／筑波大学　99年

現代語訳

（陰暦）九月の有明の月（の美しさ）に誘われるようにして、蔵人の少将は、指貫（の裾）を（忍び歩きで外出するのに）ふさわしいように引き上げて、たった一人で、小舎人童だけを引き連れて、（夜が明けても）そのまま（二人の姿を）きっと朝霧も十分に隠してくれそうなほどに、深くたち込めているころに、（蔵人少将が）「趣のあるような家で、（門が）開いているような（ところ）があればいいなあ」と言って歩いて行くと、木立の風情ある家（のかたわら）で、（その家の中から）琴（きん）の音色が、かすかに聞こえてくるので、たいそう嬉しくなって（蔵人少将はその家のまわりを）ぐるりと回る。

門の脇など、（入り込めるような）崩れたところはあるだろうかと（思って）見（てまわっ）たけれども、たいそう、築地塀など完全なので、かえってがっかりして、（いったい）どんな人があんなに（見事に琴を）弾いているのであろうと、むやみに知りたく思うのだが、どうしてよいのかもわからなくて、いつものように、声を出させて随身に（歌を）お歌わせになる。

ゆくかたも……行こうとする方角も忘れてしまうほどに、この夜明け方、（私を）引きとめるような、（あなたの）お弾きになる（すばらしい）琴の音色ですね

と歌わせて、ほんとうに、しばらくの間、（塀の）中からだれか（出てくるか）と（蔵人少将は）胸がどきどきなさったが、そんな気配もないのは（張り合いもなく）残念で、（そのままそこは諦めて）歩いて通り過ぎて行くと、（しばらくして行き会った家では、）いかにも感じのよさそうな少女たちが、四、五人ほど小走りに行き違い、小舎人童や奉公人の男などが、気の利いた感じの浅手の小箱のようなものを（うやうやしく）捧げ持ったり、（また）風情のある手紙を、（肌に直接触れないように大切に）袖の上に置いたりして、出入りする家がある。

（蔵人少将は）何をしているのだろうと、興味をひかれて、人目（の途絶えるの）を見はからって、そっと（邸の中に）忍び込んで、たいそう繁った薄の中に立っていると、八つか九つくらいの女の子で、たいそうかわいらしい（子で）、薄紫色の袙（あこめ）や紅梅色（の表着）などを無造作に着ている（子が）、小さな貝をガラスの壺に入れて、むこうから駆けてくる様子が気ぜわしそうであるのを、かわいいと（感じながら蔵人少将が）見ていらっしゃると、（その子は蔵人少将の）直衣の袖を（薄の繁った中から）見つけて、「ここに、だれかいるわ」と深い考えもなく言うので、（蔵人少将は）困ってしまって、「しいっ、静かになさいな。（私は、こちらのお邸に）お話し申しあげなければならないことがあって、たいそうこっそりと参上した者ですよ。ちょっとこちらへおいでなさい」と言うと、（少女は）「明日の（貝合せの）ことを考えますと、今からゆとりがなくて、そわそわしておりますの」と、（まるで小鳥か何かが）さえずり（るように口早にしゃべ）りかけて、今にも行ってしまいそうに見えるようだ。

【訳注】

＊有明の月……陰暦で毎月下旬の、夜明けの空に残る月。

＊指貫……袴の一種で、裾の周りに紐を指し貫いておき、裾をくくって穿く。本来は袋状にして中を踏み引きずって穿いていたが、歩行の便のために裾の括りから足首を出して縛ることもあった。この場面も、外を歩くときに裾を地にすらないように、括りを縛っている状態をさす。

＊小舎人童……貴人の身辺に仕え雑用をする召使いの少年。

＊琴（きん）……中国伝来の琴柱（ことじ）を用いない七弦の琴。「琴」を「こと」と訓むときは弦楽器の総称。

＊随身……貴人の身辺に付き従う従者のこと。護衛役として朝廷によって任ぜられる下級の官人。

＊破子……ヒノキの白木で作られた、中に仕切りのある弁当箱のようなもの。

＊袙……肌着と表着の間に着る服。少女の場合、袙を何枚か重ねて「表着」を省略することも多い。

＊瑠璃……紫がかった紺色のガラス。

＊直衣……上達部の男性の平常服。「蔵人」あるいは「少将」という肩書きは殿上人だが、殿上人でも家格が高くて将来は上達部に昇進することが確実なような場合は着ることが多い。

解答

問1　夜が明けてもそのまま、二人の姿をきっと朝霧も十分に隠してくれそうなほど、深くたち込めているころに

問2　ほのかに聞こえる琴の声が女性との出会いを予感させてたいそう嬉しく、邸内に入ろうと屋敷の周辺を回ってみたが、門の脇や築地塀など崩れた箇所もなく完全で、屋敷の中の様子を覗くこともできないから。〔94字〕

問3　行こうとしているところも思わず忘れてしまうほどに、この夜明け方に、歩いている私を引き止める声がするような気がしましたが、それはこのお屋敷の中のどなたかがお弾きになるらしい、素晴らしく上手な琴の調べでしたよ。〔103字〕

問4　蔵人少将は、屋敷内に勝手に忍び込み、薄に隠れて中の様子を覗いているのを少女に見つけられてしまったので、少女が大声を上げることで邸内の人々に自分の闖入を知られたら、せっかくの垣間見を台無しにされてしまうと思い、少女をうまく言いくるめて手なずけようとしたから。〔128字〕

【問題】（自習）

出典…菅原孝標女『浜松中納言物語』「巻二」の一節　／　九州大学　96年

現代語訳

今夜はこのままここ〔＝大弐邸〕にお泊まりになるように、（大弐が中納言を）しきりにお引き留め申し上げるので、（中納言が）室内にお入りになって、少し休もうとなさると、（大弐は）嬉しくて、奥の（部屋の）方から小柄な女を押し出して、「（あなたの）おみ足を（この女に）お揉み申し上げさせなさっていただきたい」と言って、（中納言の前から）下がった。（中納言は）たいそう不審に思って、「（いったい）誰をどうするつもりなのか」とついびっくりしてしまうけれども、（そんなことを気にして女のほうを）御覧にならないようなのも（出てきた）女がきっと居たたまれない思いをするに違いないので、（女が）気の毒で、「（大弐殿の）お許しがあった（私の）足でも揉んでくださいな」と言って、お引き寄せになると、（暗くてよく見えないとはいえ、女の）つややかに美しい様子が、たいそう上品な感じがして（衣服の薫き染めも）香り高く、手に触れる感じも本当にたいそう小柄で、なよやかにかわいらしい気配は、通り一遍の（女房風情の）女とは思えない。（その雰囲気から中納言は）「（さてはこの女は大弐が）本当に、何かにつけて、手が掛かり（すぎるほど大切で）扱いに困っていることを嘆いて話題にする（、あの）娘であろう。（大弐は）私の気持ちを世間にありがちに（好色なのだと）当てずっぽうをして（このように娘が私の夜伽（よとぎ）をするように）しむけるのであろうよ。（私としては）今となっては、すばらしく美しい天女が天から（地上に）降りてきたとしても、（自分の）気持ちを少しも乱れさせるはずもないというのになあ」とお思いになるけれども、（立場をなくしては女が気の毒だと思っていたために）「（奥の方の自分の部屋へ）戻っておしまいよ」とおっしゃるわけにもいかないので、何となく面倒にお思いになりながら、（女を）近くに引き寄せて、袖を交わしてちょっと横におなりになったところ、（女の）手に触れる感じや雰囲気は、たいそう好ましくて愛らしいに違いないが、（中納言の）心の中では、（かつての恋人である大将の姫君や別れたばかりの唐の后とは）別の女性とは親しく付き合おうともお思いになれないのを第一（の理由）として、（第二の理由には）唐の人々で（同じ船に乗って自分を）見送りに来ている人々も（まだこの太宰府に）大勢いることだし、「あれほど、（唐の）最高の大臣の（婿になるようにとの気持ちで自分を）引きつけていたのでさえ、（断って）身を寄せなくなってしまったのに、（日本に）到着したばかりですぐに、（唐の大臣どころか自分よりもさらに身分の劣る）大弐の婿になってしまった」と（唐で）噂になる

のもひどく（体裁が）悪く、（また）この日本においては、「大将殿の姫君が（自分のせいで）尼におなりになったのを耳にしていながら、それを気にも掛けずに、このように（別の女に）親しく好意を寄せてしまったのだそうだ」と噂になるのも（大将の姫君にとって）気の毒にお感じになるので、（大弐の娘とは契りを結ぶこともせずに）ただたいそう親しみ深い様子であれこれとお話になる（だけな）ので、（そんな中納言の態度を）女はまったくわけが判らないのに違いない、しばらくは意外で茫然としているふうだったけれども、（中納言の）これほど立派な御様子で、よそよそしくはなく（軽い）約束事をあれこれとお話しになるので、（そのうちに、女は）嬉しくてしみじみと心を動かして、（話すだけで契りを結ぼうとはしない中納言の態度にはやはり）納得がいかないことではあるが、気持ちは落ち着いて、うちとけて添い寝をしている様子も（中納言には）しみじみと心ひかれるはずのことではあるが、なまじ（本当に契りを結んでしまったかのような）わけあり顔で未明に起き出すようなのもわざとらしいので、お寝すごしになったかのようにして（明るくなってから起きて）、海が見える方の（妻）戸を押し開けて、（入ってくる光で一夜を一緒に過ごした）この人を御覧になると、（女は）十七、八歳ほどに違いない、たいそう若々しくなよやかに寄り添って、上品で風情のある感じで、（顔の）色があくまでも白い（上）に、額にこぼれかかっている髪の毛の筋の透き間透き間や生え具合など、「ここは見劣りがする」と目につくところもなく、すばらしい。何もかも、つややかで美しく慕わしい感じである。（中納言はその娘の様子を初めて目にして）「（暗がりの中で）思っていた以上に目も覚めるほど（美しく）もあることだなあ」と（思うと）、（契りを結ぶことはするまいとはいっても）やはり（このまま）見捨てるようなことも不本意で、心を込めて後で再会する機会を（女に）期待させて、（部屋の外へ）出て行こうとなさる。（そのときの中納言の歌は、）

ゆめゆめよ……決して、決して、他の草に隠れるように茂る葛の葉の中でも特に他から隠れる葉のように、心深いところではまったく少しの間も（あなたを）忘れるつもりはないと私は思うばかりですよ

（女は）御返歌を申し上げようもなく気が引けたが、

忘れずは……（あなたが私を）お忘れにならないとおっしゃるなら、あの葛の下葉のさらにもっと下を吹く風が葛の葉の裏側を見せる、その「うらみ」ではありませんが、（私が）あなたを恨みに思わない程度にはお手紙をくださいませ

どうしようもなく遠慮がちに顔を隠して（抑えて）いる声も、たいそう可憐で若々しく風情がある。

解答

問1　A＝サ行下二段　B＝女　C＝中納言　D＝使役　E＝中納言　F＝女　G＝（太宰）大弐　H＝中納言
I＝誂え（「他に対する願望」も可／「願望」は不可）

問2　ハ　問3　好色な性格（色好み）〔解答例〕　問4　ね　問5　日本（本朝）　問6　ニ・ト・リ

問7　手あたり（5・9行目）　問8　「うらみ」に葉の裏を見る意の「裏見」と「恨み」とが掛けられている。〔解答例〕

問9　『更級日記』

解説

問1　順番にみていこう。まず、「まゐらす」の活用の種類だが、次にきているのが「さす」であることから、「まゐらせ」は未然形であることがわかる。未然形が「e」で終わるのは、サ変・下一段・下二段の三つだが、「まゐらす」は明らかにサ変・下一段ではないので、下二段と判定する。また「せ」はサ行なので、Aにはサ行下二段を入れる。次にその説明だが、4行目で中納言が「ゆるされありつる足も押さへたまへかし」と女に向かって言っていることから、「女」が「中納言」の足を揉むことだと判断できる。したがって、Bに女、Cに中納言を入れる。

D「さす」の識別は、次に尊敬の補助動詞がきていなければ「使役」と即答できるのだが、ここは「たまふ」がきているので、文法的には判断できない。意味から考えていくことになるが、右にみたように「女が中納言の足を揉む」のである以上、中納言からすれば「女に足を揉ませる」となるはずなので、ここは「使役」。また、そのことからEには中納言、Fには女を入れる。

敬意の方向を問う設問は、敬語に関する頻出問題。考え方をしっかり把握しておこう。まずGだが、敬意を表しているのは、その敬語を使っている本人に決まっている。したがって、一般にその敬語が地の文で用いられていれば「作者」、会話文などで用いられていれば「話し手」となる。ここはかぎ括弧があり会話文だとわかるので、Gには話し手である「（太宰）大弐」を入れる。次にHだが、敬意の対象はその敬語が尊敬語なら動作の主体、謙譲語なら動作の客体、丁寧語なら聞き手（読者）となる。「たまふ」

は尊敬語なので、動作の主体を入れればよい。ここは使役が用いられておりややこしいかもしれないが、「まゐらせさす」の主体は中納言である。

「なん」の識別も頻出。ここは「終助詞」であることが表から明らかなので、迷うことなくⅠには、「誂え」ないし「他に対する願望」を入れる。

問2　選択肢を横に眺めてやると、「女とは思えない」という末尾の部分はすべてに共通している。これは「人とおぼえず」に相当する箇所なので、この設問では前半の「かいなで」の意味がポイントだとわかる。

さてこの「かいなで」だが、これが動詞「かきなづ」のイ音便「かいなづ」の転成名詞で、表面をさらりと撫でるだけというところから「とおりいっぺんだ」という意味を表す言葉だとわかれば問題はない。しかし、これを単語知識から解く受験生は少ないだろうから、ここでは文脈を参考にして考えてみよう。

この「かいなでの人とおぼえず」というのは中納言の感想だが、ならば中納言にそう思わせたものがあるはずだ。それが「にほひありさま…らうたげなる気色」である。つまり、太宰大弐の家で夜伽に女を供された中納言だが、実際にその女が近づいてきてみると、とても夜伽程度の女に思われない上品な風情に接して「かいなでの人とおぼえず」との感想を抱いたのである。ホと考えた諸君がいたかもしれないが、中納言は本当にこの女が「足を揉む」ために供された女性だと思っていたわけではない（傍線部に続く叙述から明らか）。したがって、ハが正解となる。

問3　直後の「ただ今は、いみじき天女天降りたりとも、心をつゆ迷はすべからぬものを」をヒントにして考えてみよう。これは中納言が、太宰大弐は「世の常の心」を持っていると思っているらしいが自分はたとえ非常に美しい天女が目の前に現れても心を惑わすことはない、と思うところである。ということは、「世の常の心」と「美しい天女を見て惑わない心」とは対比の関係にあることになり、これを逆に捉えれば、ここでいう「世の常の心」とは、「美しい天女を見て惑うような心」ということになる。

つまり、夜伽の女性を供された中納言が、今の自分はどんな美女が目の前に出現しようとも気持ちがぐらつくことはないが、きっと太宰大弐は自分が世間一般の男たちのような好色の心を持っていると思ってこのような女性を供したのだろう、と思う場面なのである。

問4　活用形の設問では、下接語に着目するのが鉄則である。ここでは空欄の後に何もきていない。つまり、そこで文が終止する場合である。基本的に文を終止できるのは終止形と命令形だが、係り結びなどがあると連体形や已然形でも文を終止することがある。したがって、文が終止している場合はまず「ぞ・なむ・や・か・こそ」の係助詞が上にあるかをチェックして、あればその結び、なければ終止形または命令形とするのが常道である。

この場合は上に係助詞がないので、普通なら終止形「ぬ」を入れるところだが、すると「入ってしまう」となって意味が通じない。したがって、ここはもう一つの命令形「ね」を入れる。

問5　「『唐土』の対である」というのが最大のヒント。「唐土」に対して「この世」と言うのだから、「日本」以外に考えられない。

問6　直前に「おぼさるれば」とある。これは「已然形（るれ）＋ば」の形で「～なので」という原因理由を表している。ならば、この直前部分が解答ということである。

「心のうちに、また人をけ近う見むとしもおぼされぬをもととして」が第一の理由、「唐土の人々の……いとわろく」が第二の理由、「この世にとりては……いとほしうおぼさるれば」が第三の理由である。それぞれ、「別の女性とは親しく付き合おうと思っていなかったから」でリ、「唐の大臣の求婚話を断ったのにそれより劣る太宰大弐の娘と帰国早々関係を持ったと知られては体裁が悪いから」でニ、「大将の娘が尼になったのを知りながら他の女性と関係をもっては彼女が気の毒だから」でトが選べる。

問7　暗闇の中にいたということは、視界が塞がれていたということ。したがって、視覚表現以外のものを探す。ここでは、触覚表現「手あたり」が該当する。

問8　掛詞の指摘。頻出掛詞を探す・地名に注意する・和歌の詠まれた状況をヒントにするなどのポイントがあるが、ここでは「うらみ」が掛詞であると知らないと少し面倒。設問に掛詞があるという以上、ひらがな部分を中心に探すことになる。知らなかった諸君は、これを機に覚えておくと便利。ここでは、「恨み」と「裏見」が掛けられているが、海岸風景などが出てくると「裏見」が「浦見」になる。

問9　菅原孝標女の作品と言われたら、『更級日記』を思い浮かべるのが受験生の常識。なお、これ以外にも『夜の寝覚』の作者かともされている（『浜松中納言物語』同様藤原定家以来の説）が、学会の共通認識とは言いがたい。一つでよいのなら、『更級日記』と答えるべきであろう。

●メモ●

4章

【問題】（演習）

出典…香川景樹・内山真弓　編『歌学提要』「総論」の一部　／　横浜国立大学　95年

現代語訳

古代の日常の言葉は、今の時代の古い言葉である。今の日常の言葉は、後の時代の古い言葉である。古代の言葉は学ばねばならないものであって、（日常生活で）口にする必要があるものではない。日常の言葉は実際に使えばよいものであって、学ぶ必要があるものではない。ところが、最近、（万葉集を範とする）万葉ぶりという主張が出てきて、世間の人が理解できない言葉を（歌に）使い始めたのは、偏狭な所業であることだ。万葉集の歌も、宣命や祝詞の言葉も、（これらの言葉が使われていた）その当時の人は、少しも支障なく聞いて判ったものであるのは、その時代の日常の言葉だからなのだ。今の（時代の日常の言葉で作られた）歌も千年後には（今の万葉集と）同様になるだろう。ひたすら古代（の言葉）を崇拝し、現代（の言葉）を卑下して、上代に遡ろうとしても、（どちらが崇高で、どちらが俗的かは決められないもので）清濁は決まらず、日々流れ変わっていく言葉の源流は、どうして汲み取って判ることができようか。それなのに、古代の歌風を真似し装って、古代の言葉を使って、（それだけのことで）昔（の歌の純粋な姿）に返ったのだと考えているのは、見ていて恥ずかしい愚行ではないか。千年（もの遙か昔）を真似し装う損害は、ほんのわずかだといっても、後に（その愚行が尾を）引いて（後世に影響して）いくであろう弊害は、甚大なものであるはずだ。たとえ古代（の正統な歌の姿）にたち返ることができたとしても、今の御時世に背いていったいどうしようか（現代の人々が理解できなかったら、まったく無意味なはずだ）。だから代々の勅撰集の歌は、いったいどれが同じ様式であろうか（みな違う様式を持っているはずだ）。その（様式の）推移は、取りも直さずその時代時代の習わし（のあらわれ）であって、（個人的な力では）どうできるようなものでもない。例の（一派が提唱している、歌風を万葉の）昔に復古しようとするのは、まるで流れる（大河の）水をせきとめるようなものである。（自然の流れは）せきとめて止まるだろうか（、いや、止まるはずはないのだ）。（そんなことをすると）しまいには（言葉の流れは）とんでもない方向

へ流れさまよって、ますます（混迷をきたして）濁り、ますます（形がさだまらず）流れて、美しい言葉を留める余地がなくなってしまうに違いない。昔の言葉だけを優雅なものだと考え、日常の言葉を卑俗なものだと軽視して、（歌に）利用しないのは、まるで（自分の身体が）臭い身体だといって、自分自身を嫌うのと同じである。たとえ嫌ったところで（自分の）身体を捨てることはできない。どんなに（日常の言葉を）軽視したとしても、（この時代に生きている限り）卑俗（な世間）から抜け出すことはできないのだ。世俗の中に（身を）処してこそ歌はあるのだ。深山幽谷に世間を（嫌って）隠棲し、無為自然の超俗を学んで、心に陰影を宿さず、他方では、身を不要なものとして放り出して（出家をして）しまったなら、どんな歌があろうか（どんな歌も浮かぶ余地はないだろう）。

解答

問1　千年の昔を模倣する労力の無駄は、たいした問題ではないというものの、そのような愚行が後世に及ぼすであろう害は、多大であるにちがいない

問2　昔にあってこそ日常語として問題なく用いられた古語を、語源も語法もわからない現代人が昔を尊んで用いようとしても十分に理解できるものではないから。〔71字〕

問3　日常語を用いて詠まれる歌が、各御代の風俗を反映しながら移り変わっていくこと。〔38字〕

問4　和歌というものは、さまざまな俗の感情がおこるところに身をおき、今の時代の日常語を用いて詠むべきであるということ。〔56字〕

【問題】（自習）

出典…『古本説話集』「上巻　長能・道済の事　第二十六」の全文。引用歌は「玄玄集」（藤原長能）、「金葉集」（源道済）、「袋草紙」（藤原長能）　／　東京都立大学　98年

現代語訳

今となっては昔のことだが、長能、道済という歌人たちが、（歌の詠みぶりを）激しく挑み合って詠んだそうである。（藤原）長能は、『蜻蛉日記』を書いた人の*兄弟で、（代々）伝わった（家柄の）歌人（であり）、（一方の源）道済は、（源）信明といった歌人の孫で、（どちらも歌道の名門の出として、長能・道済の二人は）たいそう競い合っていたが、鷹狩の歌を二人が詠んだ際に、長能は、

あられ降る……あられが降る交野の御野〔＝御領地〕で鷹狩をしていると、蓑の借り衣もなく、狩衣がすっかり濡れてしまった。

雨宿りの場所を貸してくれる人もいないので

（と詠んだ。これに対して）道済は、

ぬれぬれも……（降る雪で）濡れに濡れながらも、やはり鷹狩をし続けていこう。（この）はし鷹の上羽に降りかかる雪を払い落とし払い落として

と詠んで、それぞれ「自分の（歌の方）がすぐれている」と論じながら、四条大納言（藤原公任卿）のところへ二人は参上して、（それぞれの歌を）判定していただいたところ、大納言がおっしゃることには、「どちらも良い（歌であると思う）のにつけても、（長能の歌は）あられでは、宿を借りるほどには、どうして濡れようか（、そこまでは濡れないのではないか）。ここのところが劣っている。（ただ）歌の品格は良い。（それに対して）道済の（歌）は、（降る雪で濡れに濡れながらも鷹狩を続けようというように）もっともな詠み方をしている。後世においても、勅撰集などにもきっと入集するにちがいない」と（いう判定が）あったので、道済は、（うれしさのあまり）舞うようにしてこの歌を口ずさみ、退出して行った。（一方）長能は、物思いに沈む姿で、退出して行った。これまでは何事（につけて）も、長能は（道済より）上回っていたのに、今度ばかりは自分の考えとは違っていたと（いうことである）。

（さて、また別のときに、）春（の過ぎるの）を惜しんで、三月が小の月であった（とき）に、長能が、

心憂き……（今年は）なんとつまらない年でありもすることよ。（まだ）二十九日だというのに、春が終わってしまうことだ

と詠みあげたのを、例の（四条）大納言が、「春（というもの）は二十九日間しかないものなのか」とおっしゃったということを聞いて、（長能は）たいへんな過ち（をしてしまった）と思って、一言も申しあげず、そっと退出してしまった。そうして、そのころから、（長能は）病気にかかって重態だということをお聞きになって、（四条）大納言が、見舞いに（使者を）お遣わしになった（その）返事として、「『春は二十九日しかないのか』と（いうお言葉が）ございましたので、とんでもない誤りをいたしてしまいましたことよと、（我ながら）情けなく嘆かわしくございました（こと）から、このような病気にかかっ（てしまっ）たのでございます」と申しあげて、（その後）間もなく死んでしまった。「それほどまでに（自分の歌に対する批評を気にして命を落とすくらいに、歌に）一心に思いをこめていたことなのに、心なくも（揚げ足を取るようなことを）言って（しまって、気の毒なことをしたことだ）」と、後々まで（四条）大納言はたいそうお嘆きになった。胸にしみるほど風流数奇の道に徹した話であるなあ。

＊長能は、道綱母〔＝倫寧女（ともやすのむすめ）〕から見て実は弟である。兄弟の順に関わらず、女性から見た弟の兄弟を一括して「せ（ひと）」と呼ぶのは、古い用法として知られている。

解答

問1　「狩衣」と「借り衣」との掛詞

問2　(ア)　せ＝サ変動詞「す」の未然形＋させ＝使役の助動詞「さす」の連用形＋たてまつる＝ラ行四段補助動詞「たてまつる」の連体形

(イ)　入り＝ラ行四段活用動詞「入る」の連用形＋な＝確述の助動詞「ぬ」の未然形＋む＝推量の助動詞「む」の終止形

問3　B　宿を借りるほどにはどうして濡れようか、そこまでは濡れないのではないか。

E　歌に対する批評を気にして命を落とすほどまでに、歌に一心に思いをこめていたことなのに、心なくも揚げ足を取るようなことを言ってしまって、気の毒なことをしたことだ。

問4　好敵手の歌に対して自分の歌が劣ると、歌道の達人に判定されたこと。〔32字・解答例〕

問5　病気見舞い

問6　自分の歌の不備を歌道の達人に指摘されたことを恥じて病気になり、ついには死んでしまうほど、長能は歌道に真剣だったという点。〔60字・解答例〕

解説

問1　掛詞の指摘。「かり」はよく出てくる言葉なので、知っていると楽。「仮・雁・借り・狩り」などが掛けられる。あとは、これらの中からこの場にふさわしい「かり」を探し出せばよいだけである。このように、頻出掛詞を二十くらいしっかりと覚えておくと便利。

ここでは、「鷹狩の歌」が詠まれているので、一つは「狩り」である。このように、その場の状況を踏まえた言葉が掛詞の一つの意味になることがしばしばある。このような知識も、掛詞を指摘する場合には有効である。

次に、もう一つの意味だが、これは設問の「御野」と「蓑」の掛詞という指摘を参考にする。一つの部分に二つの意味が掛けられている以上、その二つは、上からの意味と下への意味になることが多い。「みの」の場合だと、「交野の御野」という上からの意味と「蓑のかりごろも」という下への意味になっているということである。そこで、「蓑のかりごろも」という点から考える。「蓑」は雨具なので、「蓑の衣」があれば「狩衣」が濡れることはない。「宿かす人しなければ」とも考え合わせると、ここは「蓑の衣」を貸してくれる人がいないので「狩衣」が濡れると考えて、「借り衣」と判定する。

問2　(ア)　品詞分解は特に困難な箇所はないはずである。「せ・させ・たてまつる」となる。次にその文法的説明だが、「せ」は前に「判」という体言があるので「判をする」という意味にとるのが自然。つまり、サ変動詞「す」の未然形ということである。次の「させ」は「させたまふ」などのように直後に尊敬の補助動詞がきていないので、文法的意味は使役。また、「たてまつる」という補助動詞に接続しているので、活用形は連用形である。最後の「たてまつる」だが、本動詞の場合は尊敬語と謙譲語の二種があるが、こ

のような補助動詞の場合には謙譲語の用法しかない。また、接続助詞の「に」につながるので、活用形は連体形である。

(イ) ポイントは「なむ」。「なむ」の識別は頻出事項なので、しっかり習得しておこう。まず「入り」について、これはラ行四段活用動詞「入る」の連用形。「入る」にはラ行下二段で活用して「入れる」の意になる場合もあるが、ここは語尾が「i」なので下二段にはなりえない。次の「なむ」だが、このように《連用形＋なむ》となっている場合は、完了の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「む」の二つの助動詞の組み合わされた「なむ」と判定する。ただし、ここで示した「完了」や「推量」というのは、いわゆる「完了の助動詞」「推量の助動詞」という場合の「完了」や「推量」なので、文法的意味は別に考える必要がある。ということでこの場合の「な」だが、次に《推量の助動詞》がきているので、文法的意味は「確述（強意）」と判定する。また「む」は、「道済の歌（＝三人称）」が主語なので文法的意味は「推量」と判定し、係り結びなどになっていないので活用形は終止形と判定する。

問3 **B** ポイントは「いかで」。この「いかで」は、疑問・反語の文脈で用いられて「どうして」と訳す場合と、意志・願望と呼応して「何とかして」と訳す場合がある。ここは、前後のつながりから考えて、前者と判定する。つまり、「いかで濡れむぞ」で「どうして濡れようか、いや濡れまい」の意である。残るのは前半の「宿借るばかりは」だが、「ばかり」は程度を表す副助詞なので「宿を借りるほどには」と訳す。

E 「よしなし」に注意しつつ逐語訳すると、「それほどまでに一心に思いをこめていたことなのに、心なくも言って」となる。ここまでの処理に困難はないはず。大切なのはここからで、「さばかり」に含まれる指示語の処理と「言ひて」のあとの省略文節の補いがポイントとなる。まず「さばかり」の方だが、直前の「『春は二十九日あるか」と候ひしを、あさましき僻事をもして候ひけるかなと、心憂く嘆かしく候ひしより、かかる病になりて候ふ也』と申して、程なく失せにけり」をまとめる。歌に対する批評を気にして命を落としてしまうくらいに、長能は歌に思いをこめていたのである。したがって、この点を明確にすることが大切である。また、ここがわかれば「言ひて」のあとの省略文節も補えるだろう。自分の一言が原因で命を落としたことに対する後悔・憐憫といった言葉が、このあとには続くはずである。「気の毒なことをした」に類する言葉を補う。

問4 「この度は」とあるので、今回どのようなことがあったのかをまとめればよい。ポイントは、①自分の歌がライバルの歌に劣る

と判定されたこと、②その判定が藤原公任によってなされたこと、の二点である。

ちなみに、ここに登場する藤原公任は当時の大歌人で、三番目の勅撰和歌集である『拾遺和歌集』の編纂にも携わった人物である。それゆえ、彼の判定は非常に重んじられていた。歌論系の説話ではしばしば登場する人物なので、この程度の知識はもっておく方がよいだろう。

問5 「とぶらふ」は、「訪問する・尋ねる・死をいたむ」などの意味で用いられるが、ここは「重きよし（＝病気で重態であること）」を聞いての行動なので、「病気見舞いをする・安否を問う」という意味であるとわかる。

問6 「すきずきし」の意味を知らないと解答の方向は見えてこないだろう。この言葉は、「風流である」などと訳されるが、基本的には、ある一つの事柄に夢中になっていることを表す言葉だと押さえておきたい。平安時代半ば以降のキーワードである。それゆえ、この後半部分で、誰がどのようなことに熱心に打ち込んでいるのかを答えればよい。

まず、「誰が」に相当するのは、後半部の説話の主人公である長能で問題ない。その長能が夢中になっていたのは、歌である。したがって、「長能が歌に心から打ち込んでいたこと」というのが答案の核になる。

次に考えるのは、その具体的な内容である。これは**問3**のE「さばかり」で説明したように、歌に対する批評を気にして命を落としてしまったということが、長能の歌に対する思い入れを端的に表している。したがって、この点を右の核に付け足して、六十字以内でまとめればよいことになる。

●メモ●

5章

【問題】（演習）

出典…二葉亭四迷『小説文体意見』／京都大学　後期日程　99年

文章略解

言文一致は、現在はまだ試験段階であり、直ちに排斥するのは早計である。雅俗折衷ほどに人々に定着していないため、語尾の聞き苦しさなどを嫌悪する向きもあろうが、だからといって言文一致が風趣を欠くとは言い切れまい。特に小説の文体においては、主張が平易に読み取れることこそが重要であり、その点で言文一致は雅俗折衷よりも優れている。私は創作を試みつつあるが、いかなる文体が適当なのかが現時点ではよくわからない。

解答

問1　イ　低俗で風趣のないものだとは言えないということ。

ロ　たいそう美しい字句が連ねてあるということ。

ハ　文章を美しくするために作者が振り回されたということ。

ニ　まだ試験段階であり、社会に定着していないということ。

問2　「詩、歌」においては美しい語句を連ねることに重点を置くべきであるが、「小説」においては表現の美しさのみならず、主張が平易に読み取れることも重要である。〔75字〕

問3　雅俗折衷体は既に何百年もの歳月を経て人々の習慣として定着しているので、現時点で言文一致体よりも強い勢力を保っている

のは不思議ではない、ということ。〔73字〕

問4 「雅俗折衷」にも「言文一致」にも一長一短がある。詩歌では雅言雅語の必要度が高いが、平易さを旨とする小説の文体には言文一致の方が優れている。言文一致の語尾の聞き苦しさを嫌悪する向きもあるが、これは雅俗折衷ほどには人々が慣れていないだけのことで、やがて歳月が解決するはずだ。〔135字〕

【問題】（自習）

出典…正岡子規『叙事文』（「日本附録週報」一九〇〇年二・三月号）／横浜市立大学　国際文化学部　97年

文章略解

ある人が「寒垢離」を知らせるのに、いきなり「当地の寒垢離といふは」と書き始めたが、これでは面白くない。叙事文とは本来、実地に見たことを基に書くべきであるが、それに前置きとして冗長にならない程度の「附たり」があってもよい。抽象的な叙述（虚叙）は人間の理性に訴えるが、具体的な叙述（実叙）は人間の感性に訴えるものである。それぞれが短い時間の小部分を連続して示し、時々刻々の変化を表現するのが文章の利点である。

解答

問1　a＝し（く）　b＝つけ（たり）　c＝ふ（ける）　d＝も（し）　e＝か（つ）

問2　激しい寒さで頬の皮膚に鳥肌が立っていく感じ。〔22字・解答例〕

問3　本題への前置きとして読者の関心を引きつける効果。〔24字・解答例〕

問4　真実味の感じられない決まり切った文句を述べていること。〔27字・解答例〕

問5　「実地を見て書」くことで文章は読者に強く訴えるものになるから。〔31字・解答例〕

問6　A＝理性　B＝感情

問7　各々の断章を時間を追う形で連続的に示せること。〔23字・解答例〕

問8　実地に見たことを基にして、時間的に連続した小部分として描写し、冗長にならないように書くべきである。〔49字・解答例〕

解説

問1　明治期の文語文が素材となった出題においては、漢字の読み書きの問われ方も特色がある。この設問のように「訓読み」（あるいは漢文脈特有の語の読み下し）が問われたり、現在は用いられることの少ない漢語が問われたりするので要注意である。早めに出題傾向を見定め、集中的に学習しておこう。

問2　直前の文に「氷りつくやうに冷えて来る」（7行目）とあり、この部分はその感覚を表したものだと読みとれよう。したがって、解答の核は「寒さ」ということになる。その「寒さ」を踏まえて読んでいくと、傍線部分直前に「時々聞こえる犬の遠吠」とあるが、これはその「寒さ」をよりいっそう感じさせる契機となる（つまりは、周囲の空気をふるわせる）ものであるとわかる。この「犬の遠吠」が恐怖をかき立てるものであると捉えるには少々無理がある。

解答にあたっては、この「寒さ」を、「頬の粟粒が殖える」ということにつなげていくように心がける。寒くて頬に粒々が殖えていく感じ……ということから「鳥肌」という内容は想像がつこう。これに相当する内容が入っていれば、おそらくは出題者の要求を満たした解になろう。

問3　傍線部分を含む引用が、「前置の『附たり』などありても宜し」（3行目）ということの例として挙げられていることに注意。ここでは「寒垢離」を書くのに「例の如く……記したる者なり」（1～2行目）というのでは「面白からず」であるから「附たり」が前置きとしてあってもいい……という主旨のことが述べられており、その例としてこの引用部分があるのである。

そのように踏まえてこの傍線部分を見ていくと、この「饂飩屋」の登場はまさにその「附たり」の例であると読みとれよう。「寒垢離」と直接関係ないやりとりがこの「饂飩屋」との間でしばらく続いた後に、「オイ此辺を寒垢離は通らんか」（13行目）と転換して本題に入っていくのである。

したがって、解答としては、①「本題には直接関係のない前置きである」ということ・②それによって読者にとっての「面白み」（興味）を増すということ……の二点があることが望まれる。

問4　「紋切型」とは、「決まり切った文句」「常套句」のこと。ここでは直前にある「饂飩屋」の科白「今夜は近頃に無いお寒さでござります……」（12行目以下）が「決まり切った文句」だ、ということである。解答の核はここ。天気や気候の挨拶は、客商売の人が初めての客に相対する際に比較的無難であることから、よく用いられるわけだ。

あとは解答欄の大きさに合わせて表現を工夫すればよい。解答例では「真実味の感じられない」という言葉を補ったが、これは解答欄が短ければカットして差し支えない。

問5　傍線部分の直前に「若し実地を見て書きしものならば」（20～21行目）とあることに注目すれば、この設問で求められているのは、「実地を見て書く」ことがどのような意味で「幾倍の面白味を増したる」ことにつながるのか、という説明であるとわかる。

この「実地を見て書く」ことは次段落では「実叙」＝「具象的叙述」（23行目）とされている。この「実叙」は「絵画の如し」（25行目）であり、「或る一箇所の景色を詳細に見せ且つ愉快を感ぜしむる」（25～26行目）ものである。ここの内容から、「読者にリアルな感じを与える」という旨の指摘を導きたい。その内容があればＯＫ。

なお、傍線部分の直前にある「無き事を机上に製造して前置と為すは必ず失敗を招く」（19～20行目）を使って「失敗がなくなる」という方向で解答を導いても、やや具体性を欠く。どのような「失敗がなくなる」ことでどういうメリットがあるのか……がこれでは説明できない。

問6　**問5**で見たように、「実叙」は、それを見る人に「感ぜしむる」ことをその大きな効果として持つ。だとすれば、**B**の部分に入れるべきは、「感じる」ということに関わる漢字二字、ということとなる。「感性」「感情」でよかろう。こう考えてくれば**A**の部分はそれと相対するもの、つまりは「理性」となる。設問の指示に「文中の漢字二字」とないことにも注意を払いたい。

問7　解答の制限が「二十五字以内」であることから推せば、設問の要求はここの傍線部分における比喩的な表現の意味するところを端的に説明することにあろう。ここでは、「絵画」と比べた場合の「文章」の長所として「多くの粗画……を幾枚となく時間的に連続せしむる」（26～27行目）と述べられているところの意味を、一般的に通じる言い方に改めていくことを考えればよい。その前の「絵画の如く空間的に精密なる能はざれども」の部分は特に取り上げる必要はない（取り込もうとすると字数制限に合わない）。「粗画」という表現は「絵画」の喩えに関わる言い方なので、これを「文章」に置き換えるとするなら、「切れ切れの文章」＝「断章」ということになろうか。これが「時間的に連続」するという点を示せば、制限字数にあった解答となろう。

問8　問題文中に「叙事文」という語が登場するのは、末尾の部分に「普通の実叙的叙事文は……」（27～28行目）とあるところのみである。ここに注目して、筆者（＝正岡子規）が考えている「叙事文」のあり方を抽出すると、以下のようになろう。

(1)　「実叙的」であること＝「実地に見て書く」こと（**↑問5**）

(2)　部分部分を時間的に連続させること（**↑問7**）

(3)　「短き時間を一秒一分の小部分に切つて細く写し、秒々分々に変化する有様を連続せしむる」（↑28行目以下）

解答にあたっては、この三つの要素を含めて五十字以内でまとめればよい。

L3T/L3TK/L3TF
難関国公立大国語／難関大国語Ｔ
京大国語／難関大国語Ｔ（京大）
一橋大国語／難関大国語Ｔ（一橋大）

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製